慶應義塾 醫学部新聞
発行所 三四会医学部新聞編集室
〒160−8582 東京都新宿区信濃町35
電話（3353）1211 内線64996
会員については会費に購読料が含まれる
発行人 比企能樹
毎月 1回20日発行

信濃町駅前・各種診療
慶應義塾大学病院
■診察時間＝午前9時〜午前11時
■電話＝5363−1211（大代表）

# 第80回 北里記念式典挙行

**北里賞　澤本 和延（75相当）　名古屋市立大学大学院医学研究科再生医学分野　教授**
「成体脳におけるニューロンの新生メカニズム」

**北里賞　久保田 義顕（79回）　総合医科学研究センター　特任講師**
「血管パターニング制御機構に基づく抗腫瘍血管新生治療戦略の開発」

**北島賞　松本 守雄（65回）　整形外科学　准教授**
「頚椎加齢変化と頚椎疾患の自然経過に関する研究」

**北島賞　山岸 敬幸（68回）　小児科学　専任講師**
「心臓血管発生と先天性心疾患発症の分子機構の解明」

今年度受賞者との集合写真（上段左から武田純三病院長、比企能樹三四会長、北里一郎氏、清家篤塾長、戸山芳昭常任理事、笠原忠常任理事、末松誠医学部長、下段左から澤本和延氏、久保田義顕氏、松本守雄氏、山岸敬幸氏）

6月10日午後1時より第80回北里記念式典が北里講堂で行われた。北里記念式典は初代医学部長である北里柴三郎先生のご功績を称え、例年御命日の前日である6月12日に行われているが、今年は同10日に挙行された。北里賞・北島賞は共に歴史と権威のある学術賞であり、末松誠医学部長をはじめとした10人の選考委員により毎年選出されている。

来賓として、北里家を代表して北里柴三郎先生のご令孫である北里一郎氏、北里研究所常任理事・石館武夫氏、同常任理事・土本寛二氏、同理事・和泉徹氏らが出席された。

義塾からは、清家篤塾長、末松誠医学部長、戸山芳昭常任理事、笠原忠常任理事、比企能樹三四会長らが来賓を迎えた。

挨拶を行う清家篤塾長

はじめに一同で北里柴三郎先生への黙祷を行った後、清家塾長より挨拶がなされた。清家塾長は、北里先生や福澤先生が何よりも重んじた学問を継承し、それを通して社会の発展成長に貢献することが重要だと述べた。続いて登壇した末松医学部長は、北里先生が創設にご尽力された本塾医学部が2017年に創立100周年を迎えることなどに触れ、これからの医学を牽引していく4人の受賞者を礼賛した。また比企三四会長は東日本大震災の被災地を訪問したことについて触れると共に、北里先生と福澤先生が非常に親密な間柄にあったことを示すエピソードを紹介した。北里一郎氏は、今回の4人の研究は福澤先生の説いた実学の精神に基づくものであり、受賞者は北里先生と福澤先生の考えを確かに継承していると称えた。

その後、比企三四会長から北里賞2名、北島賞2名の授与が行われた。引き続いて受賞者による受賞テーマに関する講演が行われ、無事閉式となった。

（3年　森田篤帆）

# 比企会長ら震災地を訪問
## 支部三四会員の活躍に感銘と誇りを覚える

3月11日に東北地方を中心に発生した東日本地震とそれに連続して発生した津波や福島第一原発の放射能汚染問題は自然の力に対する人の無力さを知らしめる機会であったと共に、私達に何をなすべきかを改めて問う大事件であった。震災の被害の大きかった地域でも復興へ向けて必死の努力が払われている。そこでも三四会の支部会員は中心的に大きな力を発揮していた。

5月1日に三四会を代表して比企会長が支部会員を慰問のため被災地に赴いた。私もお伴をして実際の現地の状況を目の当たりにし、その問題の大きさと、それに立ち向かう三四会会員の力強い活動に触れることができた。三四会では、震災発生直後より可能な限りの通信手段を用いて、特に岩手、宮城、福島、茨城、栃木並びに千葉を中心として支部会員の安否と被災状況を確認した。時間の関係で訪問できたのは、特に被害の大きかった福島県郡山市と宮城県石巻市だけであったが、今回直接お目にかかれなかった会員の先生方にはこの紙面を通じてお見舞い申し上げたい。郡山市には12名の三四会員がおられるが、医師会長の菊池辰夫支部長（44回）を中心とする三四会員の強いリーダーシップで、医師会が市行政と団結して被災者の救済に当たられていたことに感銘と誇りを覚えた。また、郡山は最も多くの原発地域からの非難者を受け入れているが、その方たちへの医療サポートをもボランティアを募って直接的支援に乗り出していた。原正夫郡山市長にも面会して問題への対応と医療者として関われる支援についてご意見をうかがうことができた。地震による建造物の倒壊・破損などで入院を含め、医療機関の運営に多大な支障が発生したこと、それに対して医師会病院への患者の一時的避難の対応もいち早くなされていた。なお解決されていない大きな問題は放射能被害であり、市民の生活の不安の最も大きな原因となっていた。小中学校の校庭は市の判断で表面の土を削り、ボタ山のように積み上げ、それを樹脂で固めていた。長期にわたる対策が必要なことを認識せざるを得なかった。

菊池福島三四会支部長と共に郡山市長に面会

石巻の川村・鈴木両先生を訪問

次に仙台から宮城県支部長の出江紳一先生（62回）に御同行いただき、JR仙石線が不通のため車で石巻へ向かったが、海沿いの地域のほとんどが津波によって破壊的被害を受け、一見して大変な状況であった。地震によって地盤沈下が生じ、水面がなおすぐのところにあり、土嚢を川淵に積み上げて高波の被害を防いでいる状況に、今後の復興の難しさを認識した。川村尚道先生（49回）からは、気がつかれた時はすでに水が押し寄せて、避難することができず、ご自宅の1階が水没した状態で、水が引くまでの1週間を2階で過ごされるという事態に陥った実体験を伺った。また鈴木明宏先生（59回）のご自宅は北上川のそばで、まさに破壊された家や流された車や瓦礫などのそばにあった。周囲の状況を勘案するに、地震から5分で機転を利かせて避難した英知で一命を取り留められた感があった。しかし、壊滅的な石巻の市民を守るために、ご自身の医療施設を復活させて今後の医療活動に当たられる準備を開始されている使命に燃えた力強いお二人に接して、三四会の誇りを感じた。今回の訪問は、我々会員が同じ医療人として何を協力して行けるのかを真剣に考える機会を与えられた訪問でもあった。

（三四会副会長　末岡　浩　59回）

# 院長就任

## 浜松赤十字病院院長に就任して

**浜松赤十字病院　院長　奥田 康一（59回）**

平成23年4月1日付で、前任の安藤幸史先生（45回）の推薦で浜松赤十字病院の院長に就任いたしました。末松誠医学部長、北川雄光外科教授、山田史日本赤十字社医療事業局長、中村達浜松医大学長をはじめ多くの三四会諸先生のご尽力を得ましたことをこの紙面をお借りして深謝申し上げます。

浜松赤十字病院は昭和13年3月に浜松市内中心部の高林に創立され、市内で最も伝統ある総合病院として長く活躍してきましたが、施設の老朽化、狭隘化等のため、平成19年11月に現在の浜松市浜北区小林に移転新築しました。政令指定都市浜松の北東部を中心とする基幹病院となり、建物は地上5階の免震構造建築で、病床数は312（ICU12）床、64列と4列のCT2台、MRI、血管造影、シンチ、リニアックなどの最新鋭機器をそろえ、電子カルテ化フィルムレス化された近代病院へと生まれ変わりました。主な施設基準は地域医療支援病院、基幹型臨床研修病院、看護基準7対1などで、病院機能評価ver.6に合格し、DPC対象病院となっています。

前院長の時代にハード面での整備は大部分成し遂げられましたので、私の時代ではソフト面を中心にさらなる充実をはかる必要があります。まず医師数を増やし適正配置を行うことです。全国的にも大病院への医師集中のためか、当院のような中規模病院では、研修医をはじめ常勤スタッフ医師の獲得はきわめて困難な状況にあります。地域的にも需要は十分あり、スタッフさえもう少し充実できれば更なる展開が可能であると思われますので、医師獲得こそが院長の最大の使命となっております。

次に行うべきは、現在使用されていない1病棟52床を今秋にオープンすることです。新病院開院時は医師と看護師不足のためやむを得ずフルオープンできませんでしたが、看護師数は充足してきましたので医師にも奮起してもらいフル稼働の予定です。

中長期的には財務状態の安定化が重要です。平成22年度はキャッシュフローベースでようやく黒字化が達成されましたが、今後さらに収益性も考慮した医療経営が求められています。[illegible]

三四会諸先生方のご助力なしでは達成できないことばかりです。今後ともご指導ご鞭撻のほどよろしくお願い申し上げます。

## 恩賜財団済生会横浜市東部病院院長に就任して

**恩賜財団済生会横浜市東部病院院長　三角 隆彦（60回）**

平成23年4月1日、前院長川城丈夫先生（内45回）の後任として済生会横浜市東部病院院長に就任いたしました。学生時代は予科時代のストライキの影響で、60回生は全員卒業が半年遅れ国家試験も今は存在しない秋に受験しました。卒業後は外科学教室に入局し、3年間の一般消化器外科研修の後、心臓血管外科研究室（故井上正教授 29回）に入局し、慶應をはじめ主に北関東と神奈川県内の関連病院に出向し、約30年間臨床に専念してまいりました。それぞれの地方で、その地域の中核的病院において、良き先輩・同僚と共に研鑽を積むことができたことはかけがえのないない貴重な経験となりました。当院へは平成19年の開院時に赴任し、心臓血管外科部長兼副院長として病院管理にも参加してまいりましたが、本年3月で臨床は後進に道を譲り、4月より現職に専念することになりました。

当院は、平成19年3月30日、横浜市の支援を受けて横浜市鶴見区に済生会神奈川県病院（吉井宏院長 外53回）の急性期部門を移転し、横浜市東部地域中核病院として開院いたしました。敷地面積は約2万7500平米、建物は免震構造の10階建で、第2京浜国道（国道1号）と鶴見川が交差する新鶴見橋沿いに立地しています。病床数は一般病床466床、精神病床50床、重症心身障害児（者）施設44床の合計560床で、診療機能の特色として、①がん、心疾患、脳血管疾患等に対する高度で専門的な急性期医療の提供 ②疾患別センター方式の採用による、職種や診療科の枠を超えたチーム医療の提供 ③病診・病々連携をはじめ、介護・福祉等の分野を含めた幅広い地域医療連携への取り組みを挙げ、同時に政策的医療として、救命救急医療（三次救急）、24時間365日の二次救急医療、小児救急医療、精神救急医療および精神科合併症医療、災害時医療を掲げてまいりました。

開院以来4年が経過し、これから進めてゆくべき最重要課題として現在私が考えているのは、次の3点であります。ひとつは、対外的な観点から、本院設立の基本的構想である横浜市東部地域中核病院としての役割を再認識し、当院が先頭となって、当院の医療圏である横浜市東部地区（鶴見区と神奈川区）の約50万人と周辺の横浜市港北区、川崎市等の一部を合わせた人口約80万人の地域をひとつのゾーンとして捉え、この地域に全国のモデルとなるような地域完結型地域医療体制を構築することであります。そのためには、会員数739名と支部として最大の横浜三四会や川崎三四会の先生方のご協力が是非とも必要と考えております。

2つ目は、内部的観点から、頑張った、功績のある職員が報われるような人事評価制度を確立することであります。医療における人事評価は職種が多く評価判断基準が複雑で難しいと思われますが、少しずつでも進めてゆきたいと考えております。

第3点目は、次世代を担う医療人を育成するための教育体制を作り上げることであります。塾を中心に、近隣の大学、済生会、横浜市の他の中核病院との交流・連携を進め、初期・後期研修医だけでなく医師全体、さらには看護師・薬剤師・他のコメディカルをも対象とした、多施設横断的な教育体制が構築できればと考えています。中でも、特に塾の医学部関連教育病院としての地位は重要であり、塾医学部全体からみた立場で貢献してまいります。これらの目標を医学部、三四会各位のご協力をいただき強力に進めてゆきたいと考えています。今後ともご指導ご鞭撻のほど、よろしくお願い申し上げます。

# 「医療系三学部合同後期教育」開催

医療系三学部の合同教育（グループアプローチによる患者中心の医療実践教育プログラム、KID；Keio Interprofessional Development Program for Patient-Centered Medicine）が平成23年度からスタートした。初年度である平成23年度は、三学部の1年生に対して初期教育を、三学部の最終学年（医学部6年生、看護医療学部4年生、薬学部6年生）を対象に、後期教育をおこなう予定である。

2010年5月6日に、最初のイベントとなる初期教育のワークショップが信濃町キャンパスで行われた。初年度は、医学部生は必修、看護医療学部と薬学部学生は希望者が参加することになり、最終的には、医学部学生91名、看護医療学部学生54名、薬学部学生36名の計181名が参加した。

医学部医学教育統轄センターの門川俊明専任講師をWG委員長として、三学部の教員で構成されるWGのメンバーが、半年かけてシナリオ作製など準備をおこなった。当日は、三学部から、合計25名の教員が参加した。

ワークショップのテーマは「腎不全患者の腎代替療法の選択」。様々な患者背景・疾患を持つ6シナリオが用意された。

グループごとのポスター発表

三学部の学生たちによるグループワーク

学生はあらかじめ、割り当てられたシナリオについて事前学習をおこない、当日、「腎代替療法」についての講義を受けた後、18グループに分かれて、グループワークをおこなった。割り当てられたシナリオについて、医学的・看護学的・薬学的な視点で、患者の抱えるプロブレムをまとめ、今後の医療・ケアを計画し、ポスターにまとめるというのが与えられた課題であった。グループワークの後は、シナリオごとのポスター発表をおこない、さらに、その中から1ポスターが選ばれて、全体発表をおこなった。

グループワークでは、和気藹々とした雰囲気の中にも、患者の抱える問題の理解、今後の医療・ケアのプランについて、最終学年らしい白熱した議論がおこなわれた。グループ発表も大変活気があるものであり、東校舎講堂が、たくさんの学生・教員であふれんばかりになる光景は、壮観であった。

今回の三学部合同教育の目的は、「他職種の視点を知ることで、患者本位の医療・ケアがどういうものかを学ぶ」ということであったが、終了後のアンケートを見ると、多くの学生がその目的を達成できていたようである。また、三学部学生の交流という目的も果たせたようである。来年度、同じ病棟で顔を合わせたときには、同じ医療チームのメンバーとして仕事ができることが期待される。

なお、1年生を対象とした初期教育は、6月11日に日吉キャンパスで、8月17日に信濃町、共立芝、SFCキャンパスでおこなわれる予定である。

（医学教育統轄センター　門川俊明　70回）

## 三四会奨励賞の推薦について

目的
若手の三四会会員の研究を奨励し、実学としての慶應医学の発展を図ります。

◎対　象
1．次の各分野ですぐれた業績をあげた三四会正会員　（本塾、関連病院のみではなく、研究施設、他大学、地域等で業績を上げている三四会員も含む）
2．対象となる分野
　イ、臨床医学
　ロ、基礎医学
　ハ、地域医療、社会貢献または三四会活動等
3．臨床医学、基礎医学分野においては満40歳以下、地域医療、社会貢献または三四会活動等の分野においては、原則として満45歳以下。

◎推薦方法
1．推薦者は、三四会役員、三四会評議員、慶應義塾大学医学部教授、慶應義塾大学関連病院会会員および大学教授（三四会員）とします。
2．推薦者は、候補者の承諾を得た上で、所定の書式（７月１日発送予定の三四会奨励賞推薦状）により候補者を推薦して下さい。
3．推薦締切りは平成23年８月19日（金）必着、三四会事務局宛とします。（例年より締め切りが早くなっておりますのでご注意ください）
4．提出部数は、推薦状、論文別刷（学術集会発表の場合はそれを証明するコピーと800字程度の抄録）、地域医療・社会貢献・三四会活動等においては、それを証明する資料、ともにコピー10部が必要です。
5．対象となる研究が共著論文の場合は共著者の承諾書が必要となります。

◎選考ならびに受賞
三四会奨励賞選考委員会による厳正な選考の結果、約10名程度の受賞者を決定します。受賞者は平成23年11月11日に予定されている慶應医学会総会で表彰され、賞状および副賞が授与されます。

## 名簿アンケート返送のお願い

３年毎に改訂しております「三四会名簿」を本年10月に発行する予定です。

既に送付しています名簿アンケートをご確認いただき、修正のある方は６月30日までに必ずご返送ください。

慶應義塾大学医学部三四会

## 鑑往知来

大規模災害の心のケアでは被災者が注目されがちだが、仕事で救援・支援業務にあたる人々のケアはあまり注目されない。東日本大震災では警察、消防、自衛隊などの職業救援者に加えて、原発職員、医療福祉関係者、行政職員、教育関係者など様々な専門職が人々のために奮闘している。その業務はストレスの度合いが極めて高く、ご遺族・ご遺体・被災者などと関わるほか、二次災害の危険性とも隣り合わせである。救援者自身が被災者の場合は、その心的負担がより大きくなる。しかも、その社会的使命ゆえに逃げることも弱音を吐くことも困難である。このような、救援・支援業務に伴う強烈なストレスは「惨事ストレス」と呼ばれ、ときにはトラウマ（心的外傷）を引き起こすまでとなる。

医療者も惨事ストレスの例外ではない。発災直後のDMATをはじめ、医療者たちは被災地の最前線に出向き、最初の1カ月だけで1万5千人が現地入りしたと報告されている。しかし、圧倒的な災害規模や現場での活動の混乱に、猛烈な無力感や自責感を抱く医療者を次々に耳にする。

災害後の「心のケア」という言葉は、専門家ですら安易に使っている風潮がある。しかし、その本質はごく基本的ながらも、あまり知られていない。具体的には、ストレスは自然に回復することが殆どなので、周囲がその回復力を高めることが肝心、ということである。そのためのいたわりや支え合い、一人でため込まない為の環境作りが求められる。反応が長引くような場合は、専門家との連携が求められる。これに加えて、惨事ストレス対策には、組織的なケア態勢が不可欠である。

もし、皆様のまわりに救援者・支援者の方がいらっしゃったら、是非とも最大限の敬意とねぎらいを行っていただくことを切望する。それが、人々のために働いた勇者への最大限の心のケアではないだろうか。

（防衛医科大学校精神科学講座　重村淳　73回）